

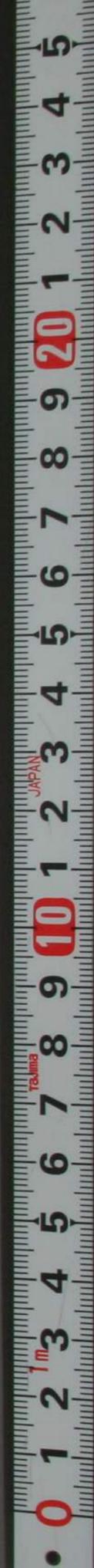


繪本通俗三國志

四編

二

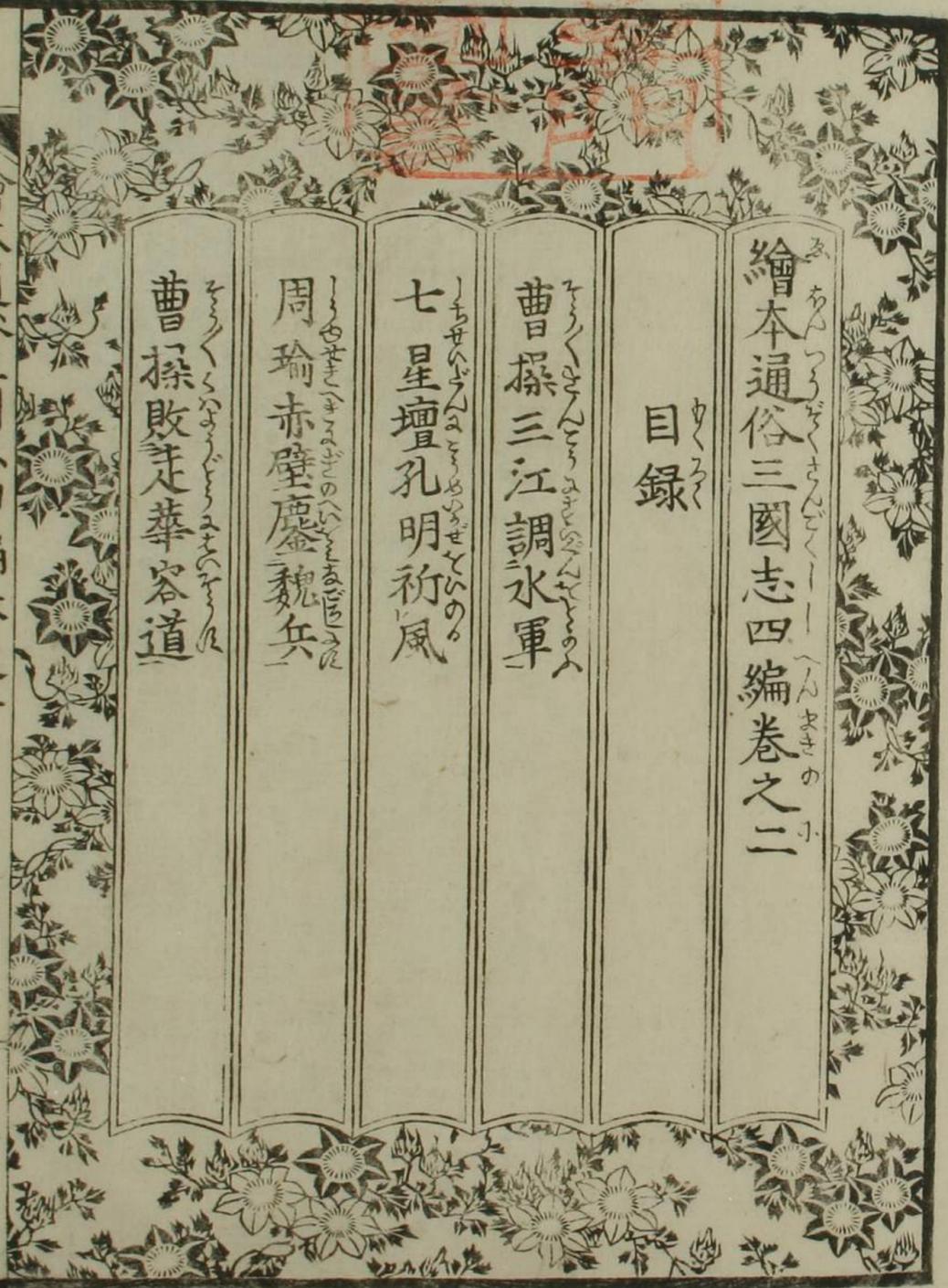
へ 21 ⁴
221
32



於
221
32

東志

手



繪本通俗三國志四編卷之二

目錄

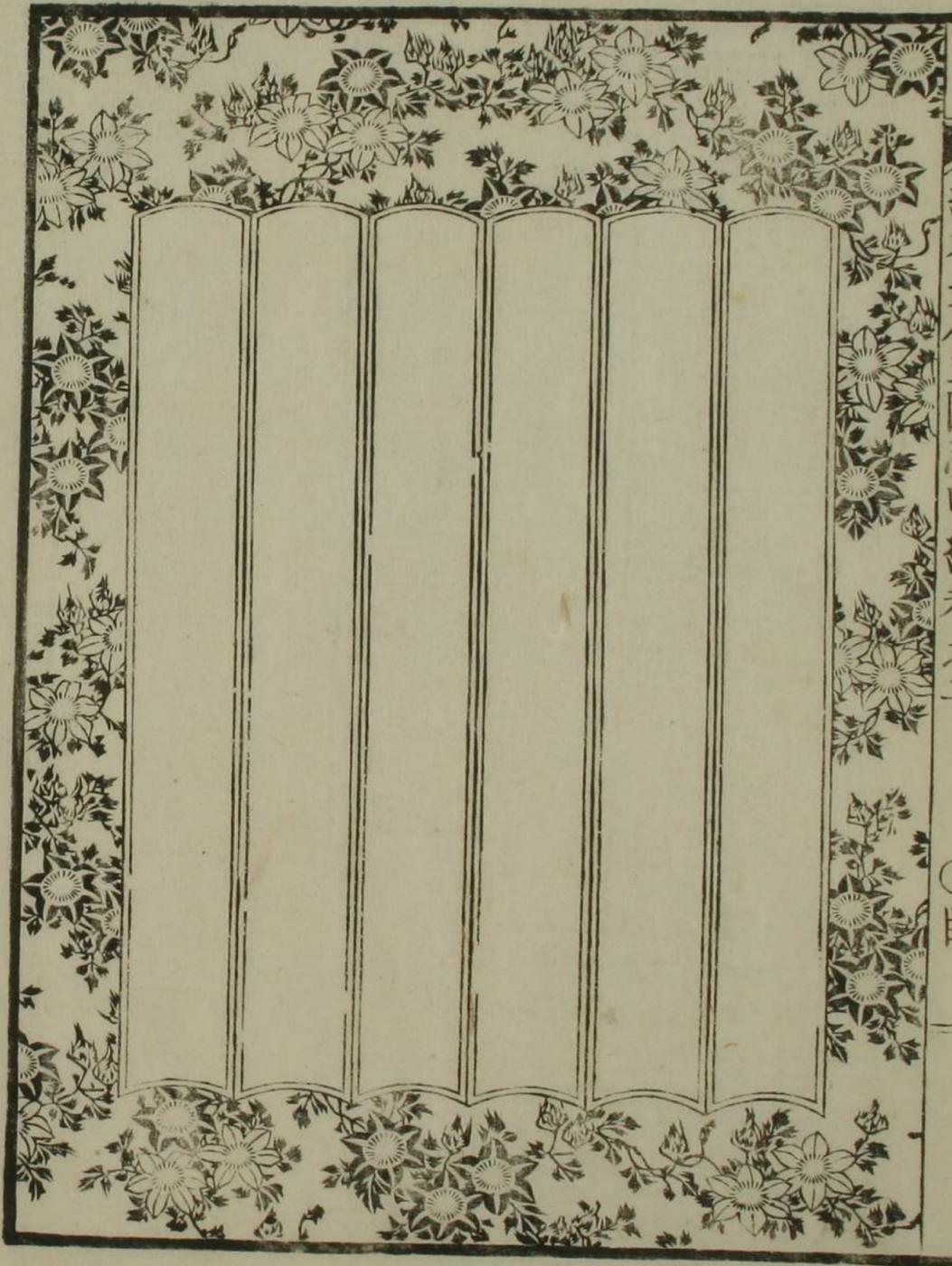
曹操三江調水軍

七星壇孔明祈風

周瑜赤壁鏖魏兵

曹操敗走華容道

繪本通俗三國志四編卷之二



繪本通俗三國志四編卷之二

曹操三江潮水軍

水軍の總大將毛玠干禁二人。曹操來り見へ大小の兵船
 鉄の鎖やめいへ。とどく排列し。武具兵糧の用意まで。一齊
 みそあまらう早く日や定めく呉や攻めんとし。いひまへ。曹操めいへる
 水寨のいたや中央の大船に坐し。文武の大將やめいへ。手
 分やぞ定ぐる。舟手の中央の黄あつ旗を立。毛玠干林前手
 へ紅の旗を立。張郃後備の白き旗を立。呂慶左備
 の青き旗を立。文聘右備の白き旗を立。呂通あり陸
 路の前手。へ紅の旗を立。徐晃後備の白き旗を立。と
 李典左備の青き旗を立。と樂進右備の白き旗を立。

夏彦淵水陸の救應使へ夏彦博曹洪護衛往來監戦
 使へ許褚張遼をホヤ宗徒のやのこごと。その外の驍將隊
 伍守と排列し水寨の三通の鼓を打ちまへ各隊門を分て
 兵船を掉出し渺たる三江の水面次第で乱さざ陳を張る
 西北の風をげく吹く白浪天をさぎくくく五十六鎖
 縛ぎあせたる船をさへ穩あると平地のどく北國の
 軍勢も勇躍して鎗を使ひ戟をさへる曹操をさへて足
 くの内え喜び呉を滅ぶさんと掌の中であつとぞかやひる
 斯く調練をさへ果て巡敬言使往來し下知をほしとのく
 次第をさへ水寨さへさへる旗の色をさへる別を五千
 余艘の小舟をさへる左右前後の便を通し二十四座の門をさへる

曹操諸將をさへる鳳雛が計を得るんがま
 安んぞあの大なる江を渡らん今天の助をよめて浩る風波を動
 をも人馬平地を行がてし南方の岸をさへる擁しと攻上
 多んよなまをさへる拒ん程をさへる生をさへる兵船をさへる
 鎖をさへる連糸のへ穩をさへる好をさへる敵をさへる火をさへる
 攻をさへる避をさへる曹操をさへる曰く汝がいの不
 遠き慮ありといへる惜むらる兵をさへる用の法をさへる荀攸
 が曰く某がん敵の火攻を怖るある人の程をさへる兵をさへるの
 法をさへる宣をさへる曹操が曰くそを大將たるものへまの天の時
 やめたる地の理を察しそを後をさへる兵を用ゆるべし算多きを勝
 算少きを負況を放無算を時を十一月の末をさへる西北

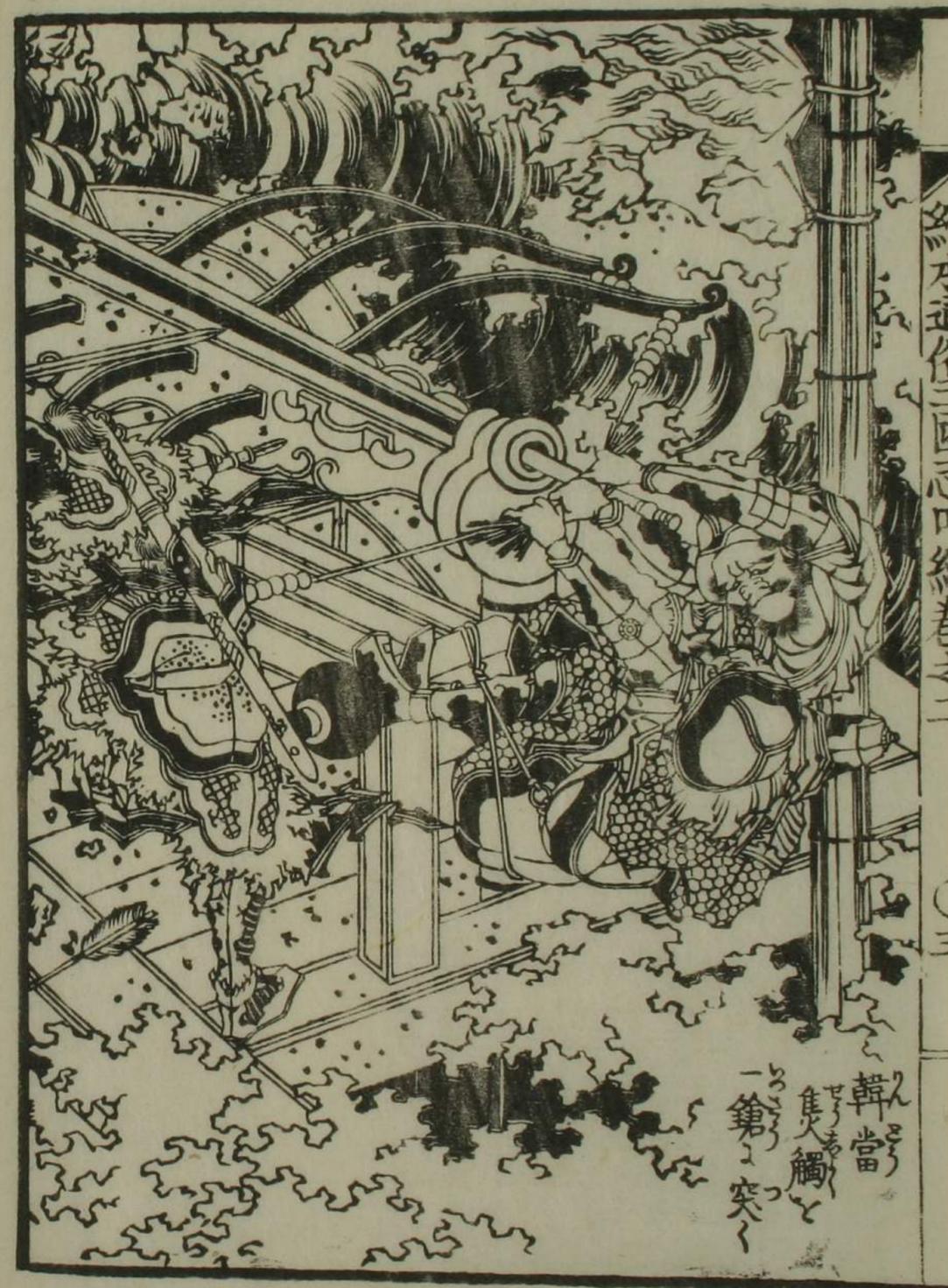
の風ハ吹ル東南の風ハ吹ル北の岸陣と
取と吳の陣ハ南あり敵も火攻をちひぶ風の力ありを
却て叶まじ今火を焼く西北の風吹きて
十月小春の時あつてその用心もなきありといひし諸將頓
首く拜伏し丞相の智畧天地を驚かす等閑の及ぶありを
とぞ感づる曹操が曰くもは從が青及徐及燕代の
と渡るべきと列坐の中より二人の大将とみ生某ホ幽燕の
國よとだのり舟軍とさくまのりいほ船をく二十船の舟
と借たち吳の陣を攻蒐を取高名くと味方の威をあらそ

とていひしとて諸人あましとて初め袁紹が大将なり
張南の二人あり曹操が曰く汝ホ北國のものとあり舟の
と自由を得と吳の國のものといひ幼少く長江の中を舟
と平地のものと汝ホ大事の命とらるる下く小兒乃
戲とやあまのあつて焦觸張南大とせんといひは若
打負て回りあつて軍法を行ひて曹操が曰く兵船は足
く鎖とやいはあつて連絡たつたが小舟ありといひ
一艘二十人余とのとてとて便利と得と焦觸が
曰くも一丈船とやいひ戦たといひ打勝るといひ奇と
足ん小舟二十艘と借も張南と二手ととて吳の陣を
攻へる曹操が曰くも小舟二十艘精兵五百人て借べし



韓當

焦觸



韓當
焦觸
第一突

明日水寨の舟を尽く推生一。大勢蒐る体をもて。吳の勢の氣で奪ひ。又文聘の三十艘の早舟を付。汝水が後備を遣へ。と。いひ。二人喜んで退生。その夜の四更。お兵糧の。五更。武具をそろへ。相待。水寨の鼓を打。金を鳴。と。數万の兵船。色々の旌。一度は蒐る体。焦觸張南二十艘の小舟。真先。夜曹操が方。鼓の声。望。水軍を調練。鼓あり。安ん。居。日。又鼓の声。江北。小舟。告。周瑜。水軍を調練。舟二十艘。波を衝。告。周瑜。水軍を調練。

先手。敵を破らん。問。韓當。周泰。一人。兵船十艘。左右。進。將の陣。動。焦觸張南。男の力。持。舟を飛。江南の岸。大將韓當。手。持。舟の頭。立。出。矢を射。二人。鋒。韓當。死。勢。攻。周泰。舟。張南。入。戦。放。石。張南。舟。退。交。七八尺。周泰。

が曰く天は不測の風雲あり況や人間を以てしてや周瑜の
 言をききしと色と失ふはまふち呻吟の声やあはれと孔明
 が曰く都督の心中をまへて類がくやまひぬる周瑜が曰くま
 り孔明が曰く涼劑をやめて治しや周瑜が曰くまじまじ
 涼劑をやめて治しや周瑜が曰くまじまじ
 よくその氣を理めと氣も順ありとれは一呼一吸のめい自
 然と治まらん周瑜は孔明の智慧深きことのみまじまじ
 りまじまじ病根を治しや周瑜が曰くまじまじ
 探ひて曰く氣を順まじまじ薬いふある方やちのなき孔明笑
 曰くまじまじの良方ありとまじまじ用ひしや都督とのみま
 平安あらん周瑜容を正しと曰く務がくち先生と入る人

孔明をまじまじ紙筆をもとら傍の人を退けとひそに十六字を
 書し破曹公互用火攻萬事俱備只欠東風と寫
 しついで周瑜にあはれとまじ病の本源ありといひまじ周瑜
 がまじまじと大まじまじ孔明へまじまじと神通を得たりとま
 じまじと量りまじまじ告まじまじ悪くありとまじまじ
 亮とまじまじでまじまじ先生とまじまじ其が病源とまじまじ今
 事急ありといまじまじ治まじまじと孫がくち教多人孔明が曰く某
 不才は少人むひり異人にあはれと八門遁甲の天書を傳
 授せり上の風を呼雨を喚鬼を使ひ神を役し中へ陣を布
 兵を用ひ民を安んず困を定むべく下い言まじまじと内
 避身て全くと害を逃まじまじ都督も東南の風をのぞ

○南屏山の壇を築き、七星壇と号し、高さ九尺、一重を構へ、百二十人の士卒を擇んで、手て旗を以て、四面をめぐらし、其壇の上を祀り、三日三夜、あつご東南の大風を借し、周瑜が曰く、三日三夜、あつご東南の大風を得、計りあつご成就せん事を急ぐ。孔明が曰く、十月二十日、甲子く、この日祭り、あつご二十三日丙寅、風を待ち、息し、周瑜大に喜び、精兵五百人をさし、壇を築せ、別を百二十人の士卒をえ、孔明のめたる風も吹起り、早くと攻蒐るべしといひ、孔明の曾肅ととも馬を早めて、南屏山といふ地形を定り、東南の方の赤土を以て、方圓二十四丈とし、高さ二尺

三重の壇を築く。下の二重は二十八宿の旗と建、東の方を青き旗、角亢氏房心尾箕斗倉龍の形を布、北の方を阜き旗、斗牛女虚危室壁玄武の勢を以て、西の方を白き旗、奎婁胃昂畢兪参白虎の威を振、南の方を紅の旗、井鬼柳星張翼彰朱雀の状を以て、北を四七二十八面あり、二重は六十四面の黄あり、旗を立て、六十四卦を書く。八位を定り、上の三重は束髪を冠て、戴ひ、阜き羅の袍を著し、鳳衣博帯朱履方裙あり、その四人を立て、左の一人は長き竿を以て、籬の羽を以て、風を招くの志あり、右の一人は七星の帯を繫る、竿を以て、持風の色を以て、後二人は宝剣を左にさし、香炉を右に持、壇より下は旌旗、宝蓋

孔明の病源を察す

孔明



會不離五回三十四卷八十一

周瑜



外本通佳三國志四續卷之二

九

大戟長鎗白旄黃鉞朱幡阜壘縣持持たるもの二十四人。四方を周んを護衛をあそとさまむべ七星壇造亭のてさるる。土月二十日甲子の吉日にいりて孔明齋戒沐浴して身と清め道服を被く。髪をさむまき踏みし壇の前を来り。曾肅より入るへ御辺の本陣へ行て周瑜と兵ととのへ。某の因祭をあそとむ。東南の風吹起る。早に攻蒐ののべしとて壇の上りル。曾肅ハ馬ののり回り。孔明ハ護衛の士卒をいぬし。各々方位をまかまそ。頭をすくへ物執とてさるる。又いふある怪とありとて。さるる。き躡ぐべくろむ。法を背くものへ立不斬分といふ。緩歩して壇の上り。香を焼水で注ぐ。天を祭り。志ぶく祝して又

壇を下り油幕の中を休息し士卒うつろぐ。飯を喫せし。又壇の上りて三度祓りし。風いよど起とて。のり。周瑜ハ程曾肅亦本陣ののり。も東南の風起る。早に攻蒐とて。吳主孫權よその由を報。黃蓋ハ二十艘の快船を用意して舟の頭を大釘でひいて打内。み芦葦乾ける。柴を積む。油を注ぎ。硫黄焰硝の類を籠て。青布の幕を四面に張兵糧を稠む。舟のてこをさく。上。み青竜の牙旗をさし。各々舳を走舸を繋ぎ。水をはる。精兵二百人々のせし。用意をあへり。も大將軍の。下知。きさる。即時。生んで時刻を待。甘寧。關澤。蔡和。蔡仲。水寨の中を居て。一人も陸にあげ。毎日酒を飲で

まことしやうの曹操は降らん計をのぞき候へり。周瑜は本陣より計を議するも、巡警の士卒を来り吳侯御旗下の勢を舟でのり生しとて去と八十里。都督の注進を以て生んと相待り入りと告るも、周瑜はさへち魯肅を以て陣を相觸兵船武具を以て下知しきい同一に出よ命とりし諸大將も奉と握りて、今あつと待蒐たり。日暮るも、天氣いづれあつと晴微風をよもせざりけむ。周瑜あつとて曰く孔明が去しゆとてうへ詠あつと浩る冬の未に至りて、いづれ東南の風あつと魯肅が曰くは量るも孔明あつと詠ふ。志づくまのいと多とてやうと三更の比にいたりて、忽ち風の声

颯とひびきけむ。とて谷のいづれ程にあり座中のりまき立周瑜の外に立坐し、建双なる旗の脚とて、西北にひるがへる。周瑜大に驚ひて曰く孔明は天地造化の功を奪ひ鬼神不測の術をあまのり、たゞ生と置くも、国の禍をあまのり。周瑜がんと安らざる。今たゞ殺して後日の禍を免るんとす。まうも左右の校尉、丁奉、徐盛二人を以て二百人の精兵とせしむ。徐盛は舟手より百人を以て、丁奉は陸路より百騎を以て、兩方より南屏山に馳行孔明を微塵もあし首を以て来と下知し、二人即時に打起直に南屏山に合む。丁奉陸路より一番の壇の上は旗を持、香炉を以て、孔明は何もありと問ふ。孔明

下りたる壇と下と油幕の内は休もゆゑまた丁奉も
 壇と下りたる徐盛も舟手よりせまきなりとも油
 幕をひきのけ孔明をたぶらむまじき行方とせむるは
 べきはれ体のものこそあやしくけまの遠は落行どた行
 て殺せや兵ももて四方を散と搜しけるが岸の辺より人
 の男のみあやしく人を通りつると問は昨日の暮方より早
 舟一艘前あり灘ありらるが孔明をたぶらむ髪をさそふてあ
 舟のり北とさし生入りて答ふと何程もへたぐらじ
 まし追付よとして丁奉の馬を飛して陸路よりまみ徐盛
 舟と早めて探もんをいぞが向ふあたりに一艘の小舟
 あり徐盛もまてて孔明あつんとまひいやく帆をひき追

蒐交ひ近くありし六船の頭は立生孔明志が住りの周都督
 一大事の使ありとまざり孔明舟を立舉り大に笑て曰
 御辺はよくもまきで来りたり早く回りて周瑜を報東
 南の風も已ま生たり早と蒐りの入とやまらるる今
 く復口を回る他日再び相見えんとていやく舟を早り
 徐盛又曰くまざり舟とせむる人事の急ある義論あり孔明
 が曰くまきまきとて周瑜が害せんとならんと量り大将趙雲
 とせむせむとせむ復口を回らんとも近付と誤るるあてま
 りま徐盛の孔明舟を帆をまきとてひく追付んとせむ
 程近ありて忽ち孔明が舟より一人の大将弓矢
 とげ立わらむ大音あげて曰くまき常山の趙雲あり劉皇

叔の命を受て軍師をいへる人回るるあふ。あんとる徐公の如く
 く追来ども。まゝとて一矢の汝を射殺す。一矢の勢のちよと
 付く。二の汝も命を汝とて。果さるる。引退て兵を
 射る。その矢のや。徐盛が舟の帆素のわたり。一矢の
 切る。その帆の水中に落て。その舟又。引退て。趙
 雲や。その帆を引る。十分の推張。飛ぶ。去る。急
 徐盛追ども卒。丁奉岸の上より。急を。急
 徐盛追ども。孔明が神機人の。長坂坡の舉動。つた
 趙雲の力。夫不當の。男將あり。早く引退て。その由を
 まゝ。等閑の。早も。早く引退て。その由を

さんとき。ゆき。回り。その趣。告る。周瑜
 て。その人。此の。晝夜。心。安
 ざら。曹操と和睦。あ。孔明。平。後
 の患。除んと怒り。曹肅。小事。大
 大事。の理。曹操。玄徳。十倍。程
 程。計。今。廢。曹操。破
 破。事。議。周瑜。理。伏。即
 時。手。分。定。ち。

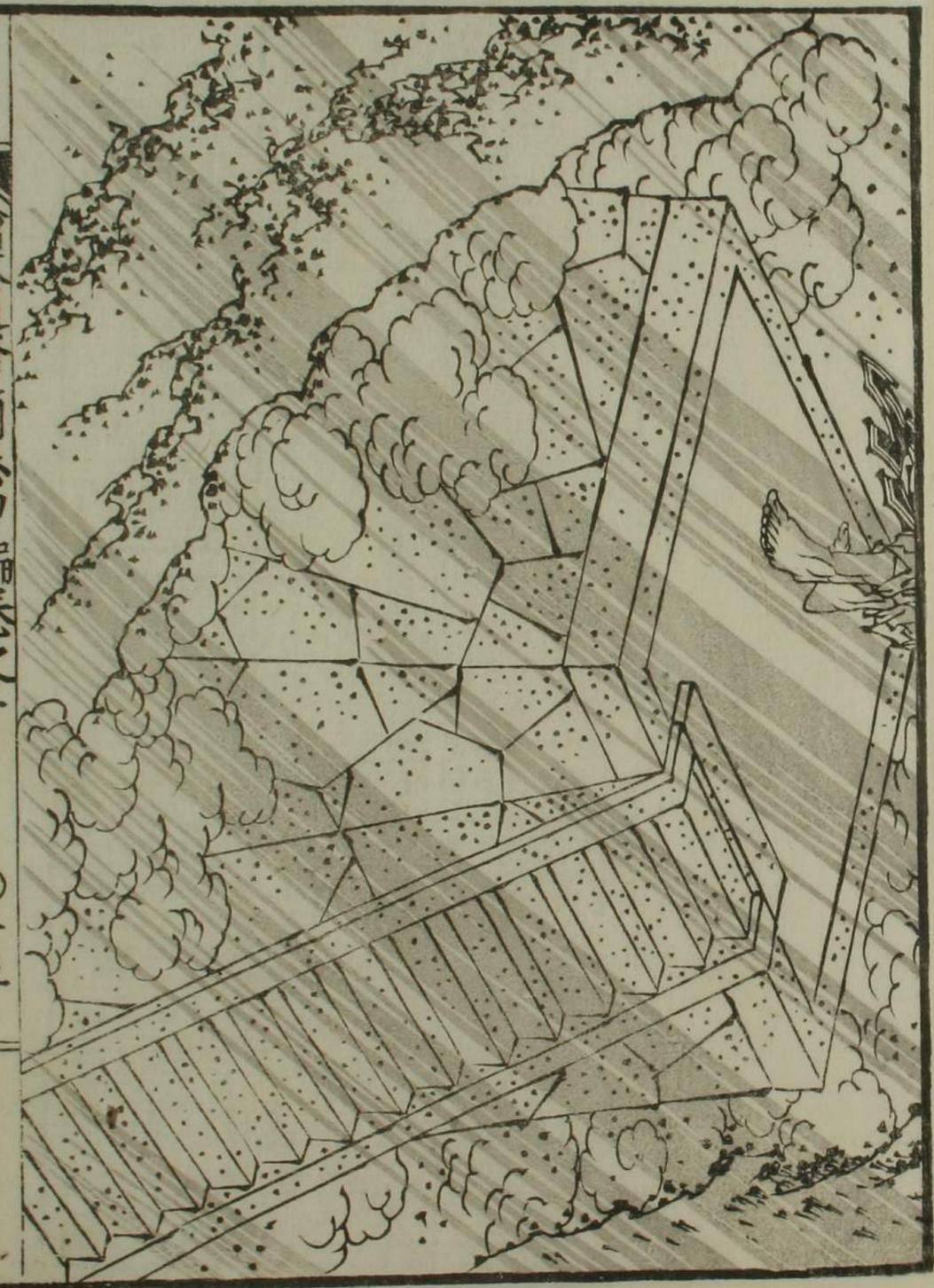
周瑜赤壁鏖金魏兵

周瑜怒て休。曹肅が諫。甘寧。寄。蔡
 蔡仲。今。曹操。降。南の岸。直



孔明

七星壇孔明祀



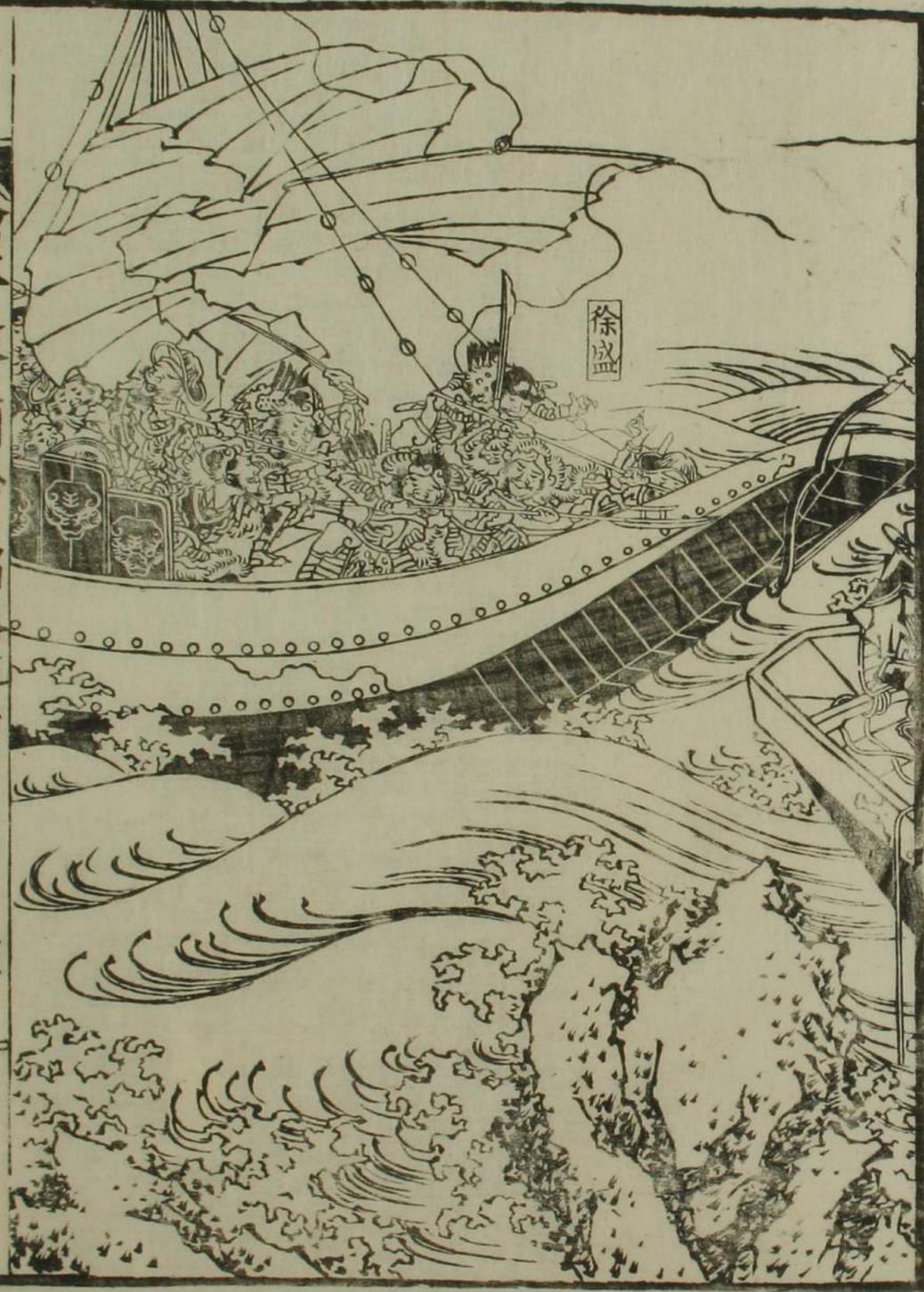
烏林の道に出でて蔡仲が旗をとりてさして曹操が兵糧を貯へ置けり行火をうけて攻蒐を又蔡和軍中みよち置べし。別用をとりていひるを甘寧計と受蔡仲と案内者として烏林とさして出たり弟二と太史慈とよび汝の三千余騎を引いて黄カスの界に出曹操が合淝の勢とさ入きりて火を付て曹操が本陣を攻よ紅の旗をひるるとは呉侯の旗下の勢ありとさるべし第三と呂蒙とよび汝の三千の兵を率して烏林を行て甘寧と一手あり曹操が陣を焼く入第四と凌統とよび汝の三千の勢を引いたち夷陵の界にいたり烏林に火の掛くとさまきりて攻破を第五と董襲とよび汝の

三千余騎を引いて漢陽より漢川に出曹操が陣を斬て入白旗をひるとさすの味方とあつて一州におき第六と潘璋とよび汝の三千の兵を引いて白旗をさし漢陽をひいて董襲とさすも曹操が陣を攻蒐とて手分とて定て六隊の軍馬路をひいて打立り陸路の味方此のどとさすも舟手の先陣黄蓋のひそる曹操が方へ入てはつて今夜の二更に兵糧をぬきんで馳参るべし青竜の牙旗をさしてさすも舟をさすも黄蓋が降参の舟ありとさり多く被しげに注進をばし火船二十艘の兵船四艘を跡に繫打続て第一の備に領兵軍官韓當第二の備に領兵軍官周泰第三の備に領兵軍官

虚く実この論あるときまてむむとや曹操よく兵で用ひて人
ども此のどくせむあつたむむむき得ん山路は烟のあづるを
てさむむあしき張ひて張る人ある体でこそせざるをうりあ
とさむひうあつたその路は来るべし御辺はあつた放しゆ
あとのひりまへ関羽命を受て関平周倉はともあひ音
餘騎を率しと華容道をせむう人玄德の曰く関羽本
より義気盛んあまむも曹操は出合とも期いのぞん
でいりあつた放さん孔明の曰く某は天文をこもる曹
操が運命いむそのあつた滅ぶまじ兎角関羽がんぬ
むり曹操が恩を受たるゆゑあつたあつたの人は宥させ
て人情にあさむむべし玄德の曰く先生の神筆せむ双ぶもの

あつた孔明の曰く明日大雨降く後曹操はあつた華容
道を走るべし去来は樊口を行く周瑜が計を用ひて見
物せんといふ孫乾は間雍といふめと城を守らせといふ山
の石の望みこころあつた曹操は陣中であつた謀將と
あつた計を論じ黄蓋が降参して侍る東南の風志は
吹く六程は曰く今日俄に東南の風出たるは味方の
為に不吉あり丞相よく察しゆ人曹操が曰く冬至は一陽
生ども来復のときたふいときり東南の風吹くそのときたふ當
れりあつた又あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
きたり黄蓋が使ありといふ密書を出しゆ曹操はあつた披
たつた周瑜が法令きびしくいふうろくといふあつたあつた今

趙雲
徐盛
兵船の
帆を
舳る



會入軍三回三回三回



水滸傳三回三回三回

こつゝも。諸大將も青竜の牙旗を立て先鋒。黄蓋といふ
文字ありて沙汰し。も曹操が船のあくる喜ば。黄蓋味
方に来る。も天の助あり。り。船を多く近付け
ま。程。是。や。ひ。さ。し。の。ぞ。と。拷。ひ。て。曰。く。上。の。船。は。あ。る。す
詐。あ。ら。う。ん。の。不。人。よ。も。と。多。ば。曹。操。が。曰。く。い。う。あ。る。の。今。程
是。が。曰。く。兵。糧。と。積。だ。る。舟。あ。ら。う。船。を。重。し。と。て。だ。ら
あ。る。ん。ま。の。舟。を。あ。い。ご。輕。く。し。と。足。入。ら。う。へ。詐。の。驗
あり。と。も。今。夜。の。東。南。の。風。急。あり。も。敵。の。計。あ。ら。う。い
ろ。し。て。拒。べ。き。曹。操。大。に。と。り。ひ。て。曰。く。な。ま。う。行。て。上。の。舟。と
も。めん。文。聘。が。曰。く。某。の。水。で。得。て。ひ。へ。船。を。く。る。行。て。と。も
ひ。かん。と。と。前。あ。る。小。舟。を。と。り。下。り。手。を。あ。げ。て。味。方。と。さ。し。

も。十。餘。艘。文。聘。舟。の。頭。に。立。あ。が。り。大。音。あ。げ。て。
曹。丞。相。の。命。あ。り。來。る。船。志。づ。く。と。も。ま。ま。と。呼。り。し。れ。ば。諸。軍
声。を。そ。ろ。へ。と。早。く。帆。を。下。せ。と。さ。け。ぶ。る。も。う。の。鼓。音。風。を。ひ。ひ
て。矢。一。の。來。り。文。聘。が。左。の。臂。に。あ。ら。り。し。れ。ば。真。倒。の。舟。底。に
射。伏。が。し。舟。ち。い。さ。く。と。大。波。は。た。へ。と。く。も。王。元。と。逃
回。る。黄。蓋。も。も。曹。操。が。水。寨。を。二。里。を。り。隔。て。刀。を。め。り
一。度。き。船。け。べ。前。あ。る。舟。と。く。と。火。を。た。も。め。り。風。は。急。あり。火。の
勢。は。起。り。そ。の。早。き。と。火。の。ど。と。船。天。に。ま。あ。ぎ。り。二。十。艘
の。火。船。水。寨。に。突。く。入。り。舟。の。頭。に。大。釘。を。打。た。ま。さ。る。あ。ら。る。不
卒。に。も。あ。ま。さ。と。勿。心。ち。近。て。隔。ぐ。相。國。の。鉄。炮。ひ。が。り。も。六。四
方。の。火。船。一。度。も。ま。た。り。三。江。の。水。面。火。を。あ。め。り。紅。天。は。通。ド。

車輪のどくある船空中に飛揚る曹操大膽で冷しと。陸の陣々のどくある同一火掛りなれば援舟をめぐりて逃んとも黄蓋の小舟に乘乗烟の内火の中にもいひて曹操を生取らんやたぬる。四五人跡ははぶひて力やと入りまをいやく走散りて尋ねるる曹操の急あるとどくいひて岸よのぶらんと身は操を張遼小舟に推来り大船よりたきけ下りてやうく逃まざる黄蓋は曹操と逃さどくさくさく尋ねるる急を袍に被たるもの大船より下りまばあまんとていひまらる舟に飛して手は刀をひききげ曹操逃るとあると黄蓋のありとまがりなりと曹操逃まがたくなるといひん苦しげきけひらり黄蓋とて逃ま

まへ曹操が舟より張遼弓を取て兵と射る黄蓋火の光乃中よりと音のひくく急を避んとまらるその夫肩先よりなりと急所の痛手みよとて水中に落入り水寒しとぐく火をあらめて百万の軍勢上り下りてさざめく喊の声天を碎くがどく左より韓當右より蒋欽赤壁の西より討て生右より周泰左より陳武赤壁の東より生し中央よりへる北国勢をあまきとて攻りりる水も火も焼れ鎗も突き矢も中りたるそのおわびて討げしとて名付と世の人の口実と三江水戦赤壁の慶金兵とやいけり。

曹操敗走華容道

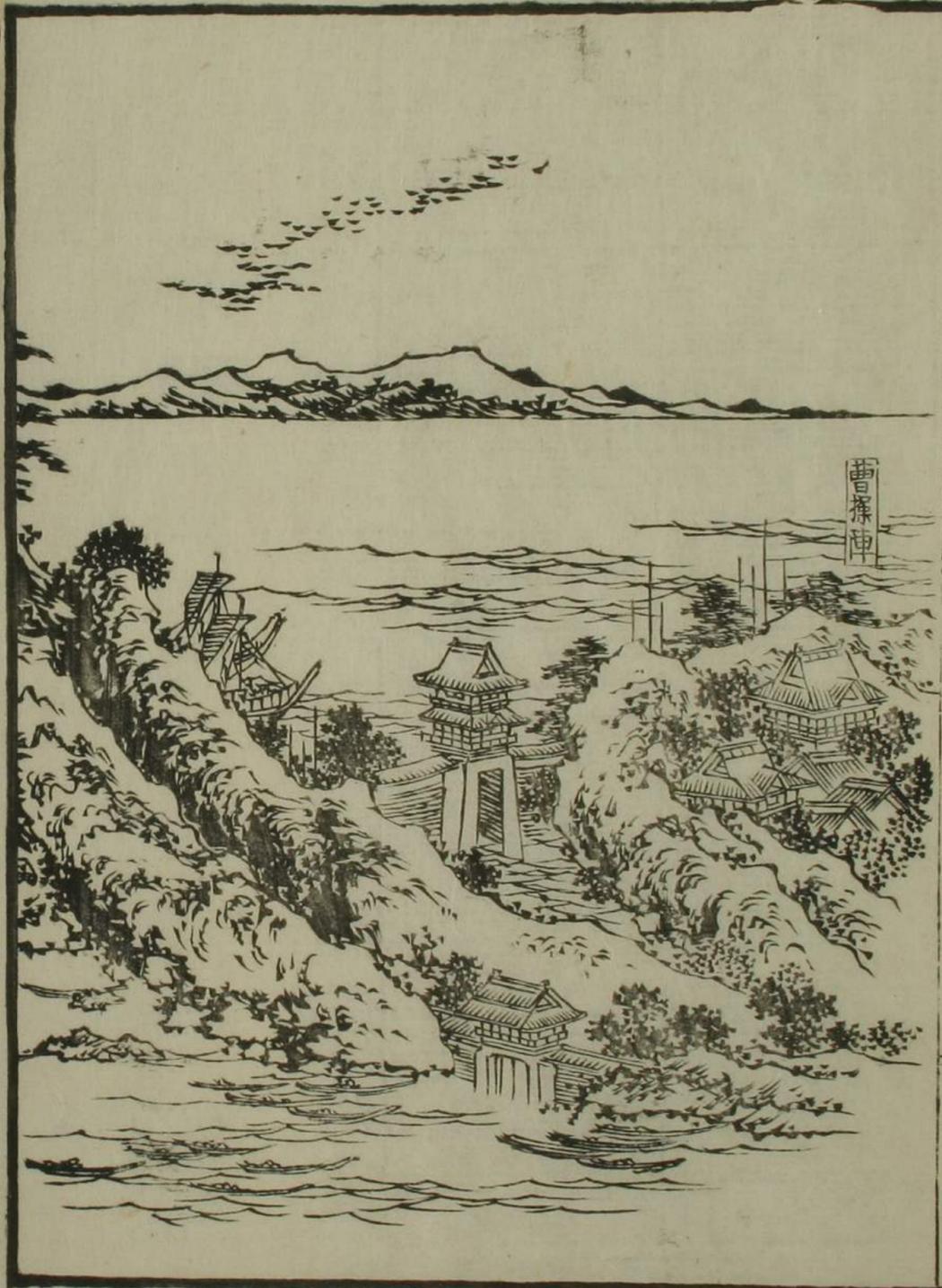
吳の大將韓當、勢ひこの川に水寨を攻る。跡より士卒千
報し、たまたま志を舵の上より人あり。將軍の字をよび告
る。韓當あやしんで、さうきく高義とまてさへ
いふ。そののりさうあつと黄蓋あつとさうさう上
とさう果しと黄蓋あり。肩あつとさうさう杖もさう
陥入る肉の中あり。さあち湿たる袍を卸せ、刀を
鏃て握し、旗を裂て瘡を束ね、さうさう袍を卸せ、さう
著せ、小舟のせと国を回さしむ。さうさう黄蓋が水練を得た
るゆゑ、痛平を負て、寒気をおどし、さうさう江に落
り、さうその身も恙あつらう。陸の陣より甘寧、さう蔡仲と。

案内者として、曹操が陣屋のいたり、一刀を蔡仲で斬死し、火
を付け、喊の声をあげ、さうさう呂蒙あつとさう。又、夜十ヶあつ
火をけ、勢ひこの川に斬入る。潘璋、董襲、太史慈、凌統は
四方より火を掛鼓を打喊を造り、さうさう天地も崩さ
さうさう。膽を冷し、形勢あり。曹操、張遼、さうさうさう
岸より百騎をり、さうさう走り、さうさう陸の陣より火のさう
あつとさう。鞭を加え、逃る。毛玠、十騎あり、さうさう
文聘、手負なる、さうさう馳加る。曹操、兵を命じ、道條
を尋ね、さうさう張遼、さうさう白く、さうさう烏林の地面、路はさう
と走る。便あり。曹操、急馬を馳せ、行な、さうさう後より一手の
勢、追掛、曹操、逃る。さうさうさうさう、さうさう火の光の中より、呂蒙

が旗をさし生と曹操大軍とてどろた張遼の跡を拒がせ急
ぎ逃んとすまは又向より山際火をうけ一簇の勢禍巻出
す。凌統ありあり馬より下と降泰せよとあり前後と困
で攻たりし。曹操膽をひやしく横をぬき走るあり忽ち二
手の軍馬をせ来り曹丞相泊まるあり徐晃あり
ありと名乗て曹操をさし生し。兩軍入るなまど戦ひ道
を尋ねて走りぬまは呂蒙凌統とゆき打勝て長追
とせしむるなり。曹操南とぞんで走るあり一彪の軍馬山に
て陣を取敵うとこまは左にあくと本表紹が大將と
曹操を降りし馬延張顛二人あり北国の勢二千余騎
と有りそのあり陣を取るる今夜俄る火の起るてんてと

あしむ散を相待たり曹操をあつて喜びその勢をあせ
て馬延張顛を千余騎をあはくと道をはなれぬ後
陣をあへし落行はまはし時心少く安くあり十里をうりて
て一手の勢が道で塞ぐ馬延とてみ出と。あまものぞと問
一人の大將大音あげまはし吳の甘寧あり。まはるるよと力
受よとのひもをてと一刀を馬延に斬張顛を逐てて鎗
をひねりて突く菓まは甘寧をひて突く又張顛を斬落
し。さんぐと討破し。曹操ふるひあまき南夷後へ
はまるとはむと西とさしと逃走るあり張郃路をくまは加
はり八まはまはあち後陣を打せ鞭を加へて走りぬるが夜
まはるる五更の比に到り火の光もとてくありぬまはまはし

周瑜
曹操
水陣
窺



んと定めたるい何くぞと問ふ荆夏の谷て曰くたまたま鳥林の
 西宜都の北あり曹操馬上まき山川峻しく樹木茂まるぞの
 ぞと天やありひや大に笑ふ諸大將問曰く丞相あまやう笑
 ひの曹操曰くは別人てまらまらあまをひて人周瑜計
 あく孔明才浅きと笑ありまらまら兵やちひびまら
 の赤伏兵一落行敵のまさを討んその言いも卒らざ
 るる両方より大鼓と打く火の光天や焦し一鹿の軍馬うけ
 出常山の趙雲あまありく相待とよづりらま曹操大驚
 ひてまら馬より落んとす張遼徐晃力て尽しと拒ま
 るる曹操辛き命と扶り火と冒し烟と突く洛延なり趙
 雲へ十分ふ打勝敵の旗物の具と奪ひ古より婦師勿掩

んの入り長追あせととく兵と収めて引回ると夜は明方
 んとまらで黒雲地と裏と東南の風のまど休む俄に大雨車
 軸のどく降来と衣と湿し甲とまら寒気堪がたま
 兎角しく二時をりまら行らま辰の刻まらなりと雨風
 一度ま定り諸軍勢とつづく飢疲まら身の上一寸も
 石あまらば曹操馬より下とその辺の在家は兵と打入る食物
 なくまらとまらとまらとまらと山の後まら火の手とあげらま
 いや敵よといまらとまらとまらと驚き騒いで取物まらとまら馬
 のつて逃らるる敵まらと味方の大將李典許褚とまらと
 としく百騎をりまらと告らま曹操まらとあま喜ば
 とまら馬と打く道といまら行前へ何ぞと問まら答て曰く一方南

夷陵の大路一方へ北夷陵の山路あり。曹操問て曰く南郡江
陵へ生んとするまのいづの路をわたりて近き谷て曰く南夷陵
の大路へ胡荈谷て経て便あり曹操兵て下知して南夷陵
まるとみまるとまの胡荈谷のいたりしをば諸軍も亦飢も疲まそ
まるとみまるとまの馬もとどく弱りしをば先陣の勢をいづら
くとまの山もそまの陣を取まらぬ掠取たるまるとまの糧を一所
まのわの兵の持たる鑼と銅とてまのまを炊き馬を殺し草
まるとみまるとまの飢をなまけ湿たる鎧袍を卸てまをぬくと乾くま
まの曹操林の下に坐して天をみて大笑諸將問て曰く丞相
さるまの周瑜孔明を笑ひひひひ趙雲をひき出し若子の人馬を
討まるとり今又あまを笑ひひひひを。曹操曰くまは孔明周瑜

大將の才あまを智恵の足ざるを笑あり。まるとまの兵を用
まのあま一手の勢を伏置んまるとまの以逸待勞あがりまると
いふまると命を逃まるとまの人の笑あり。まの言のまるとま
四方八百戦のまの地を動し。火の光天をまをまを諸軍もまをど
ろまの甲を着まるとまを赤裸まを散乱す曹操はまをある馬
まを打乗後まをまを逃まるとまの敵の勢四方を困人
の大將一丈八尺の蛇矛をまを馬を飛し。まを燕人張飛
逆賊曹操馬を下り下りて縋まるとまをその声雷のまを
まを曹操が大將張飛が名をまを。尽く膽をひるも許褚
ひかく。鞍をまを馬を飛乗張飛まをまを戦ひまをまの
まを張遼徐晃鎧を固る馬をまを張飛を拒ぎ西軍入

みだりてとせんべい戦ひし曹操もろく落延。諸將も且
戦ひ且走る曹操はさく馬をよめりて待揃兵を
うごめし手を負ぬその一人もあも前二兩條の路あり。その
南郡の通じぬといひし路の近きと問ふ大路の平さの
も五十里のより遠い。答曹操山の上の人々のぢせ。路の様
のぞましむまべその人をせ回り山路の方へ板十ヶ所火をあげて
敵ありて入る大路の方へ人ありて入る。曹
操あま山路を經て落行んとく先手の勢を下知しむ。諸
將問て曰く山の山路の華容道とて難所ありて
火の手をあげて敵ありて入る。大道より出る。曹
操合て曰く汝水兵書の虚則実之實則虚之といふ論を

孔明の計をまことのあつ今もいふある士卒も命とく
山路の烟をあげさせ人ある体てせせ。火の條の
だ。うへに伏兵をめて封止んとす山路の敵ありて
ゆへも詭の計あり今人あしとて。大
路よりしむ。計は留て一人ものたを封るべと去
る。諸將も拜伏し。丞相の妙計等閑のやぶるあ
かむとらめて。尽く華容の山路よりいり荆及びへと志す

繪本通俗三國志四編卷之二終

